モノオモイ

一言　真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノオモイ

【Ｎコード】

Ｎ６４１６Ｅ

【作者名】

一言　真

【あらすじ】

天宮美樹都、高校二年の春休み。美術部では、前代未聞の合宿を実施することになり、部員総出で、資産家である美樹都の叔父の所有する洋館へ押しかけることになった。そこで体験する、不思議な体験の数々。幻想が現実へと変貌する危険が、彼らの身へ徐々に迫りつつある。

第一項

「ごめん。待ったか」
「待ったわよ」
彼女は僕を気遣うこともなく、はっきりとそう言った。時計を見れば、既に待ち合わせの時間から十分ほど過ぎている。バス停の前に並んでいるのは、彼女だけだった。どうやらついさっき、バスが出発したようだ。
「いつも時間通りなのに、何で今日に限って遅れるのよ」
彼女は別に僕を責めるわけでもなく、ただ不思議そうにそう聞いた。
「目覚まし時計のタイマー、三十分ほど遅れて設定してた」
「今日に限ってそんなミスするんだから。……もう、しょうがないわね。この調子だと学校に着くの遅れるわよ。皆に連絡しとかないと」
彼女は呆れた表情でそう言うと、携帯を取り出そうと上着のポケットに手を伸ばした。僕は、それを手で制した。
「いいよ。連絡は僕がするから」
あらかじめ手に持っていた自分の携帯で電話をかける。
「……はい。賀川だけど」
電話越しに、落ち着いた男の声が聞こえてきた。
「ああ、僕だよ」
「……天崎？　どうした、遅刻の報告か？」
「察しが良いね。……悪いけど、寝坊した。そっちに着くのが、二十分ほど遅れそうなんだ。皆にすまないと言っておいてくれ。あとそれから、お詫びに後で何か奢るから、と」
「わかった。あまり急がなくても良いぞ。時間に余裕があるからな。……じゃあ、気をつけてな」
向こうから、電話を切った。正直こういう時、賀川の頭の切り替

えの早さに、本当に助けられる。
今のような会話なら、気を遣って言葉を選ぶ必要も無し、ただ用件だけを述べて、さっさと終わらせられる。
「誰にかけたの？」
「賀川だよ。集団行動じゃ、あいつが一番頼りになるだろ」
「まあ、確かにそうかもしれないわね。あの人、中学の時、生徒会長だったんでしょ。高校じゃ、あまり目立ってないけどね。……バス来たわよ」
そう言われて、彼女の視線の先を辿ると、道路の先から走ってくるバスの姿があった。
バスの中は、空いていた。
僕は弥生に言われて、最後尾の席へ座る。
「て、何その荷物」
腰を下ろしてから、初めて彼女の荷物の多さに気づいた。
「仕方ないでしょう。女の子は、どうしても荷物が多くなるものなのよ。美樹都こそ、よくそんな身軽な格好で……ていうか、手ぶら？」
「荷物はこないだ宅急便で送っただろ。あれだけで十分だ」
僕が涼しい顔でそう言うと、「ああ、それなら」と弥生は荷物の山を僕に差し出した。
「これ、よろしく」
「は？」
「遅刻のお詫びとして、この荷物運んで頂戴。さっきも重くてしょうがなかったんだから」
「いや、重くしてるのは自分だろ」
「文句はなし」
そう言いきられて、僕は荷物の山を渋々受け取った。
再び弥生に視線を戻すと、彼女はじっと僕の顔を見詰めていた。
「何？」
少し裏返った声で、問う。

「気づかないの？」
「何が？」
「気づいてないのね」
彼女は、少し怒った口調でそう言い、そっぽを向いてしまった。
「ああ……そうか」
一瞬彼女が何に苛立っているのかわからなかったが、ストレートだった筈の彼女の長い髪が後ろで一つに結わえられているのに気づき、僕はぽんと手を打った。
「髪型変えたのか」
「……遅い」
「へぇ。結構似合うじゃん」
後ろで一つに結わえた長い黒髪が、さらりと柔らかそうに曲がって彼女の背中の上で揺れている。
「長い髪って、結構うざったいからさ。一つにまとめようと思って」
彼女はあまり着飾ったりしない性質だ。というより、元より着飾る必要のない美人だった。
子供の頃は、好奇心旺盛なやんちゃな女の子だった。それが、成長するに従って、いつのまにか大人びた、落ち着いた性格の少女へと変化していった。
僕だけが一人変わらぬまま、取り残されているような錯覚を覚えたこともあった。まるで、幼少期の、あの頃から僕の時間は止まってしまっているかのように。
「どうしたの？」
僕がぼんやりと考え事をしながら、長い真っ黒な髪を見つめていると、弥生が怪訝そうに言った。　僕は首を振り、「いや、なんでもない」と苦笑して言った。
「……久しぶりの旅行ね」
「ああ、そういえばそうだな」
今年はまだどこにも行っていない。弥生と密かに考えていた沖縄観光のプランは、今だに実行していない。最後に旅行に行ったのは、

一昨年の冬だった気がする。
　あの時は、長谷川の叔父さんと叔母さんも一緒だった。さすがに未成年者二人では、どこの旅館にも泊めさせてもらえないだろうから。
「今回に関しては、美樹都の叔父さんが手配してくれたおかげよ。旅行から帰ってきた後、叔父さんにお礼の電話しとかなくちゃ」
「あ、そうそう。叔父さん、僕達がこの旅行から帰ってきた後に、うちに来る予定なんだってさ」
「え……そうなんだ。美樹都、久しぶりに顔合わせるんじゃないの？」
「ああ、この頃は電話でしか叔父さんと話していなかったし」
　叔父さんは、僕を育ててきてくれた恩人であり、僕が唯一親戚と呼べる人だ。今回の旅行についても、叔父さんが宿泊地を手配してくれることがなかったら、きっとこの計画は中止されていただろう。というのも、叔父さんと電話で雑談していて今回の旅行の話が出た時に、叔父さんが住人のいない古びた洋館があるからそこを使ったらどうだ、と申し出てくれたのだ。
　叔父さんが資産家であるおかげで、僕は今まで不自由なく、学生として生活して来れた。今でも僕の学費や生活費は、叔父さんがすべて負担している。叔父さんには本当に感謝してもし尽くせないような多大な恩があった。
「それにしても、凄いわね。あんな大きな洋館持っているんだから」
　弥生が目を輝かせながら、言った。こないだ、洋館の映った写真が叔父さんから送られてきて、それを弥生に見せてあげたら、感動して歓声を上げていた。弥生が、叔父さんに会う時はいつも、可愛げがある少女になりきろうとする原因が今なんとなく解ったような気がする。
「まあ、あの写真は昔のものらしいから、今じゃあの洋館もかなり古くなっているだろ」
「そうかもしれないけど……考えてみれば、あんな大きな洋館にた

った五人で泊まるんだから、スペース余り過ぎない？」
「だろうね。まあ、良いだろ。五人で悠々とくつろげるしさ」
心なしか、弥生ははしゃいでいるようだった。彼女のそういった様子から、昔の活発的な彼女の姿が垣間見えて、僕は少しほっとした。
「もしかしたら、出るかもよ」
弥生が悪戯っぽい笑みを浮かべながら、突然言った。
「出るって、何がだよ」
「あの洋館、かなり古いんでしょ？　以前の持ち主の亡霊が出たって、おかしくないじゃない」
「まあ、そうだな。その時は、弥生の部屋に駆け込むから、大丈夫だ。こんな好奇心旺盛な女の子が相手じゃ、さすがに幽霊も寄って来はしないだろ」
「何それ。何で私が好奇心旺盛なの？」
彼女は不思議そうにそう答えた。

学校に着いてみると、校門の前に背の高い男子が立っていて、僕達が近づいてくると、よっと片手を上げた。そして、
「遅いぞ、美樹都、長谷川。……朝から、仲良く　二人揃って遅刻とは。昨夜は徹夜したのかな」
と、にやりと笑みを浮かべながら、からかうように言った。僕は、この手の冷やかしには慣れている。
だが、慣れているといっても、挨拶でこんなことを言ってくるのは、部員の中でこの男だけだ。
「そうだぞ、羨ましいか、元一」
にやりと笑みを返しながら、僕はそう言った。
「なっ……本当なのか、長谷川」
元一が青ざめた顔で、弥生を見る。
「嘘に決まってるでしょ！　二人とも、朝から変な冗談止してよね」
弥生が、むっとした表情を僕と元一に向けた。すると、元一が冗

談冗談、と慌てて謝った。と、その時、
「お早う、天崎、長谷川さん。これで、全員揃ったな」
凛とした声が背後からしたので振り返ると、眼鏡を掛けた理知的な顔の男子が、やぁとこちらに片手を上げた。
「ああ、賀川。おはよう」
「今先生を呼びに言ったところだ。すぐ来るだろう」
賀川はそう言った後、僕が手に抱えている大量の荷物の山に気づくと、その半分を手に取った。さすが賀川、気が利く男だ。
「あれ。沙耶さんは？」
一人、女子生徒の姿が見当たらないことに、気づいた。
「ああ、北上さんなら、先生のところで荷物運びを手伝ってる」
「荷物運び？ああ、それなら僕も手伝いに行くよ」
「天崎、先生達はもうこっちに来る頃だから、行かなくても良いと思うぞ……おい」
賀川にそう言われる頃には、既に僕の足は動いて、校舎へと向かっていた。

第二項

「――美樹都」
その声に、後ろに振り向くと、弥生が僕の後を追ってきて、隣に並んだ。
「どうした？」
「いや、別に。待ってるのも、つまらないから」
「……そっか」
僕達は二人並びながら、中庭を歩いた。
グラウンドから、運動部の生徒達の掛け声が、聞こえてくる。
「今日もやってるな。サッカー部か」
「確か、テニス部も練習してるはずよ」
中庭に差し込んでくる日差しは暖かく、微風が木々を揺らし擦らせて、さやさやと静かな音を立てている。
校内には、春の香りが充満していた。
その甘い香りは、僕の鼻をくすぐり、いつの間にか僕は気持ち良い気分になり、目を細めていた。そして、
「もう春なんだな……」
と知らずうちに、呟いていた。
「考えてみれば、あっと言う間ね。来年は受験だし」
「受験？　まだ先じゃないか」
「そうでもないわよ。早い子は、もう予備校行って対策をしてるし」
「へぇ……」
いまいち僕には、自分の将来に対する実感が湧かなかった。とりあえず今は、先のことなんて考えずに、ただ学生生活を味わっていれば良いんだと、気楽に考えていた。そんな僕の態度に、弥生は苦笑した。
「正直、まだやりたい事もはっきりしていないのよ、私」
「そりゃ、皆そうだろ。僕もそうだ」

渡り廊下の前まで来ると、靴を脱ぎ、靴下のまま校舎の中へと入った。
と、廊下の奥からテニスウェアを着た女子生徒が歩いてきて、僕達を見ると、柔らかい微笑を向けた。
歩く度に長いストレートヘアーがさらさらと揺れ、窓から差し込む陽光が艶やかに彼女の髪を光らせている。童顔だが、柔和な目をしていて、とても優しそうな印象を受ける。
少なくとも、僕の知り合いではない。しかし、
「おはよう、美樹都君」
「え？」
彼女は優しげなその目を僕の上に据え、言った。
てっきり弥生の知り合いだと考えていた僕は、突然の挨拶に、面食らった。
「あ、ああ。おはよう」
僕は裏返った声で、答える。そして、
「……知り合いか？」
と不思議に思って弥生に問う。
弥生は、嬉しそうな表情で目の前の彼女を見つめながら、頷いた。
「おはよう、弥生」
「おはよう、美夏」
彼女達の声は、同時だった。
「久しぶりに会うわね。元気にしてた？」
「うん」
弥生の問いに、美夏と呼ばれた少女はゆっくりと頷いた。
「確か今日から、合宿だっけ？　いいなぁ」
「果たして、合宿って言えるのかどうか。まあ、久々の旅行だから、楽しんでくるわよ。お土産買ってくるからね」
「うん。楽しみに待ってるよ」
少女は素直に嬉しそうな表情を浮かべて、そう言った。
「美夏は、これから部活？」

「うん。そうだよ。今、先生を呼びに行ったところ」
「そっか。頑張ってね」
「うん。……じゃあ、私はこれで」
そう言って、少女はすたすたと早足で、廊下の奥に消えていった。
「……そうか。弥生って、結構顔広いんだっけ」
頭の中に浮かんできたことを、ぽつりと呟く。
「あの子とは同じ委員会でね、結構仲が良いのよ」
「へぇ。……僕の名前、知っていたようだけど」
「ああ、うん。私が美樹都の事、喋ったことがあったから」
職員室の前まで来ると、調度沙耶さんと先生が、扉を開けて出てきたところだった。
「おはよう、弥生……それと、天崎」
沙耶さんが、抑揚のない声で挨拶する。
「何か、僕は付け加えられてるだけって感じがするんですけど、今の挨拶」
僕は沙耶さんの元に歩み寄り、彼女が肩に下げていたボストンバックを受け取った。助かる、と沙耶さんが小さく呟く。
「……重いなぁ。何入ってるんです、これ」
「部活で使うもの。まさか天崎、遊ぶためだけに行くとでも思ってたのか？」
「……いえ。あくまでも、部活の合宿だと」
「なんだ、そうなのか。せっかく旅行に行くのに、部活なんてする気があるのか、天崎は。ご苦労なことだな」
「沙耶さんが、先に言ったんじゃないですか。……まったく。別にどうだっていいですけど」
僕がむっとしてそう言うと、沙耶さんは悪戯っぽく笑った。
「考えてみれば、美術部で合宿を開くなんて前代未聞よね」
沙耶さんの隣で、先生が苦笑しながら言った。
「おはようございます、香山先生」
弥生が、礼儀正しく挨拶をする。僕も弥生に倣った。

「ええ、お早う。今日は天気も良いし、楽しみね。賀川君たちが待ってるから早く行きましょう」
先生はそう言って、歩き出した。沙希さんが、その後に続く。と、
「……行くぞ、天崎。のろのろしてると、置いてくぞ」
重い荷物に顔を歪めている僕の方に振り返ると、またしても悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう言った。すると、
「大丈夫、美樹都？　手伝おうか？」
と、弥生が僕の持つ荷物へと手を伸ばした。
「いや、いい。このぐらいへっちゃらだ」
確かに魅力的な提案だが、ここで女子に手伝わせるようでは、男として恥ずかしい気がする。それに、沙耶さんに冷やかされるのは何としても避けたい。
「そういえば天崎、食事は当番制になったからな。男子は今日の夕食と、明日の昼、明後日の朝を担当する。先生が買出しに行ってくれるそうだから、メニュー、今のうちに考えておけよ」
沙耶さんが、さも当然といった顔で、そう言った。
「……え。何でそんなことになってるんです？　女子が三食作ってくれるんじゃないんですか？」
「馬鹿言え。そんな暇あるか。私達だって忙しいんだぞ」
「惰眠を貪るのに忙しい、と。そういうことですね。……味は、保証できませんよ。いいんですか？」
「駄目だ。美味しくなかったら、作り直してもらうからな」
この人が無茶な提案をしてくるのはいつものことだが、今回ばかりは頷くしかあるまい。確かに、女子だけに任せるのは気が引けるし、何よりこちらにはレトルトという武器がある。
「言っておくと、レトルトは駄目だからな」
と沙希さんが、付け足すように言った。
「……わ、わかっていますよ」
……こっちの思惑はお見通しってことか。
僕は、ははは、と乾いた笑い声を上げる。

「大丈夫よ。困った時は、私が手伝ってあげるから」
弥生がこっそりと小声で僕に耳打ちした。
「あんまり、甘やかすと良くないぞ。ただでさえ、天崎は弥生に世話になりっぱなしだからな」
沙耶さんは、僕達の考えを見透かしたように、言った。
「わかってます……そんなこと」
今の沙耶さんの発言が勘に触れた所為か、僕の中で、無性に『やってやる』感が湧いてきた。
「……わかりました。沙耶さんを唸らせるような、絶品を作ってやりますよ」
僕が、むすっとした表情でそう言うと、
「そうこなくては。……よし、楽しみが増えた。天崎、期待しているぞ」
と沙耶さんは、意地悪く笑った。
……そんなことを言われたら、本当に手料理を出さなくなっちゃうじゃないか。
「なになに、食事当番の話してるの？　先生も楽しみにしてるわよ、天崎君たちの手料理」
前を歩いていた先生が、後ろに振り返って、そう言った。
「……ますます悩ましい状況になったな」
僕は溜息を吐いて、小さくそう呟いた。

今年の春も、きっと去年のように楽しくなるだろう。
ここ数年、毎日が不思議なほどに楽しかった。……ほんの一時でさえ惜しむほどに。
それは、弥生や叔父さん、美術部のみんながいてくれたからだ。
まるで、本来手にすることのできないものを偶然拾ったような、そんな幸運が続いているようだった。この幸運が続く限り、僕はきっと過去に押し潰されることはない。
だが、季節は過ぎ去り、いつかこの幸運も消える。

だから僕は、その時まで、この幸福な記憶を、しっかりと胸に刻みつけておこうと思う。

春の香りは甘く、僕に、少しばかりの未来への期待と、現在への未練を与えたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6416e/

モノオモイ

2011年10月5日02時52分発行